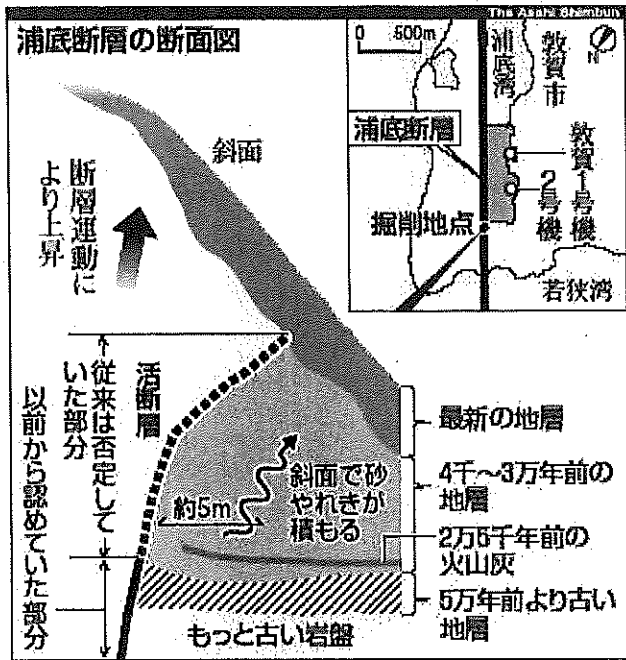


# 活断層探し厳格に

## 原発周辺審査手引案 活用が課題

国の原子力安全委員会が原発周辺の活断層調査についての手引案をまとめた。5月12日まで一般の意見を募っている。原発の耐震指針が08年、28年ぶりに改定されたことにもない、具体的に活断層をどう調査するのか、懸案となっていた。各原発の耐震性再評価（バックチェック）では、過去の活断層調査のほころびが次々に浮かび上がった。新指針や新指針を生かす態勢づくりが今後の課題になる。



手引案は、活断層調査について、新指針が明記した「変動地形的調査」の詳細を示した。地形の成り立ちを重視し、傾きなど広域的な変動を

原子炉間近でも解釈に誤り  
手引の検討委員会では、日本原子力発電教習原籍（福井県教習市）の敷地内を通る浦底断層の調査も不適切な例として挙げた。

「これが審査を通る見込みで出されているのは問題。かなり厳しい内容で手引を作らなければならぬ」。中田さんは、04年に提出された、4号機増設申請書の地質断面図の問題点を指摘した。3万年前以降に堆積した地

中国電力島根原発（松江）については「活断層の確実度の指標にはならず」と書いた。

中国電力は3月末の報告で、活断層の長さを22キロとし、調査の不備を事実上認め、調査のやり直しを要した。中田さんは谷の系統的なずれだけでなく活断層と認定できると指摘している。

電力と専門家の距離ルール化へ  
こうした事業者の調査の是非を最終的に判断するのは国の審査になる。専門家は、活断層かどうかの解釈の仕方は、専門家の間でも差があり、事業者側には戸惑いもある。手引は安全審査の指針で、事業者向けの具体的な認定基準までは示していない。

東京大の徳山英一教授は「どんなに公平な人が就いていても、次の人がそことは限らない。システムとして決めておく必要がある」と話す。安全委員は今後、専門審査などでルール化を検討していくことにした。

手引案や検討会の議事録は安全委員のサイト（http://www.nsc.go.jp/）で公開されている。

市（の2号線）を走る活断層をめぐり、広島工業大の中田高教授は谷の屈曲などから18キロと指摘したが、中国電力や国は10キロと主張し続けてきた。リニアメントにこだわってきたことが小評価の二因と指摘された。

中国電力は3月末の報告で、活断層の長さを22キロとし、調査の不備を事実上認め、調査のやり直しを要した。中田さんは谷の系統的なずれだけでなく活断層と認定できると指摘している。

を否定の根拠の一つとし、その延長線上にあるより深く古い部分だけが断層だとしている。しかし、こうした構造がある場合、地質学的には断層を想定するのが普通という。

杉山雄一・産業技術総合研究所活断層研究センター長も「明らかに関連性」（報告書作成のとき）とどこから差がなかが働き、普通なら一番考えにくいことを書いてしまったのではないかと、とひびかった。中田さんは谷の系統的なずれだけでなく活断層と認定できると指摘している。

国の指針で原発が実施した面的な掘削調査の結果、以前の解釈は誤りで、断層のずれは4千~3万年前までの地層に及び、より古い岩盤が最近も地震のたびにせり上がっているとはっきりした。

審査の透明性や客観性も課題だ。検討委では、電力会社と審査にたずさわる専門家のかわり方が議論になった。電力会社に助言した人が審査に回ることで、審査をする委員の固定化を問題視する声の一方、そもそも専門家が少ないことも、審査にたずさわる専門家が電力会社から自分の研究について聞かれた場合は、いっさい答えられないのか、といった難しさを指摘する声もあった。

## 東海第二

# チエツク体制改善要求

原電に燃料棒データミスで  
県安全対策委

日本原子力発電(原電) 運転開始以来、原子炉の水  
東海第二原発(東海村)の 位計で、燃料棒の最上部を  
安全性を検証する「県原子 実際より約五センチ設定。  
力安全対策委員会ワーキン 水位は実際より五センチ表  
グチーム(WT)」が十八 示され、トラブル時に核燃  
日、水戸市内であった。原 料の頂上部が露出する可能  
子炉内の核燃料棒の位置を 性もあった。原子力規制委  
示すデータが四十年にわた 員会は五月、この問題を保  
り、誤っていた問題を踏ま 安規定違反とした。  
え、対策委は、人為的ミス 原電は「建設時の燃料寸  
のチエツク体制の具体的な 法の変更情報や、関連部門  
改善策を原電に求めた。

東海第二は一九七八年の 務に支障のない情報として

古田座長は終了後、「施 設より、現場の運用力をど う鍛えるかが重要。規制委 (の審査)は、どうしても施

設の話になるので、WTで は、その点を重点的に見て いきたい」と述べた。

(酒井健)

## ◎新たに208カ所誤り 原電・敦賀2号破碎帯資料 規制委、再発防止求める

2019/10/12 福井新聞 2ページ 436文字

新たに208カ所誤り

原電・敦賀2号破碎帯資料

規制委、再発防止求める

原子力規制委員会は11日、原子炉建屋直下に延びる破碎帯が活断層の可能性があると指摘されている、日本原電敦賀原発2号機の審査会合を開いた。これまで提出した破碎帯に関する審査資料に多数の記載不備が見つかった事案について、原電が再チェックしたところ、新たに137ページで208カ所の誤りが見つかったと報告した。

2018年の審査会合に提出した2872ページある破碎帯の資料では、今回見つかった誤りを含め322ページで1139カ所の不備が確認された。原電は、破碎帯データを手入力で資料に記載したことなどが原因とした。破碎帯データは問題がないことを確認したとしている。

再発防止策としては、手入力作業の削減や印刷した資料が最新版ファイルのデータであるかを確認する。

規制委側からは「品質管理と再発防止を徹底してほしい」「何度も繰り返すと、データの信頼性が担保されなくなってしまう」などの注文が相次いだ。(牧野将寛)

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.

2020年3月26日 衆議院原子力問題調査特別委員会 宮川 伸 出典：福井新聞記事

<http://t21.nikkei.co.jp/g3/CMN0F12.do?jsessionid=B2D6EB65F23291B9B1C8CB9EA574E55E>

H24-D1-1

H24-D1-1

新

旧

柱状図(30.00m~60.00m)

柱状図(30.00m~60.00m)

標尺 m	標高 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩級 区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	コア採取率 (%)			記事
												R	Q	D	
					明褐色		100	17	17						32.38~42.23m ・割れ目が多く、砂~短柱状を呈する。
					灰白	CL	100	6	0						
					明褐色		100	22	22						
					灰白	CL	100	9	0						
					明褐色		100	9	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	10	10						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色	CL	100	5	0						
					明褐色		100	15	27						
					にふい橙		100	8	0						●45.91~48.28m ・破砕部である。 ・左ずれ正断層センスである。 ・主に明褐色の固結礫状部及び明赤灰色の固結粘土状部からなる。 ・走向・傾斜はN1° E58° Wである。
					明褐色		100	1	0						
					明褐色	D	100	1	0						
					明褐色		100	2	0						
					明褐色		100	2	0						
					にふい橙		100	5	0						
					灰褐	CL	100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					灰褐	D	100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						●49.20~49.91m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に明褐色の固結礫状部からなる。 ・黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.0cm ・走向・傾斜はN9° W74° Eである。
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						
					明褐色		100	1	0						●53.77~54.54m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主ににふい橙色の固結礫状部からなる。 ・黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はN20° E77° Eである。
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	2	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	2	0						●58.96~59.30m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に明褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい橙色の未固結粘土状部：累計幅1.4cm ・走向・傾斜はN8° E78° Wである。
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	2	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	4	0						

標尺 m	標高 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩級 区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	コア採取率 (%)			記事
												R	Q	D	
					明褐色		100	17	17					32.38~42.23m ・割れ目が多く、砂~短柱状を呈する。	
					灰白	CL	100	6	0						
					明褐色		100	22	22						
					灰白	CL	100	9	0						
					明褐色		100	9	0						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色		100	10	10						
					明褐色		100	4	0						
					明褐色	CL	100	5	0						
					明褐色		100	15	27						
					にふい橙		100	8	0						●45.91~48.28m ・破砕部である。 ・左ずれセンスである。 ・主に明褐色の固結礫状部からなる。 ・明赤灰色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はN1° E58° Wである。
					明褐色		100	1	0						
					明褐色	D	100	1	0						
					明褐色		100	2	0						
					明褐色		100	2	0						
					にふい橙		100	5	0						
					灰褐	CL	100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						●49.20~49.91m ・破砕部である。 ・西上りセンスである。 ・主に明褐色の固結礫状部からなる。 ・黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.0cm ・走向・傾斜はN9° W74° Eである。
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	5	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						●53.77~54.54m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主ににふい橙色の固結礫状部からなる。 ・黄褐色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm ・走向・傾斜はN20° E77° Eである。
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						●58.96~59.30m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・主に明褐色の固結礫状部からなる。 ・にふい橙色の未固結粘土状部：累計幅1.4cm ・走向・傾斜はN8° E78° Wである。
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	4	0						
					にふい橙		100	2	0						
					にふい橙		100	4	0						

●45.91~48.28m

- ・破砕部である。
- ・左ずれ正断層センスである。
- ・明褐色色の固結礫状部及び明赤灰色の固結粘土状部からなる。
- ・走向・傾斜はN1° E58° Wである。

(A) を拡大したもの

参考3-142

第633回原子力発電所の新規制基準適合性に係る審査委員会 参考資料3 (抜粋)

●45.91~48.28m

- ・破砕部である。
- ・左ずれセンスである。
- ・主に明褐色色の固結礫状部からなる。
- ・明赤灰色の未固結粘土状部：累計幅1.5cm
- ・走向・傾斜はN1° E58° Wである。

(B) を拡大したもの

参考3-142

第657回原子力発電所の新規制基準適合性に係る審査委員会 参考資料3 (抜粋)

# 組織図 Organization Chart

(2019年6月28日現在)

